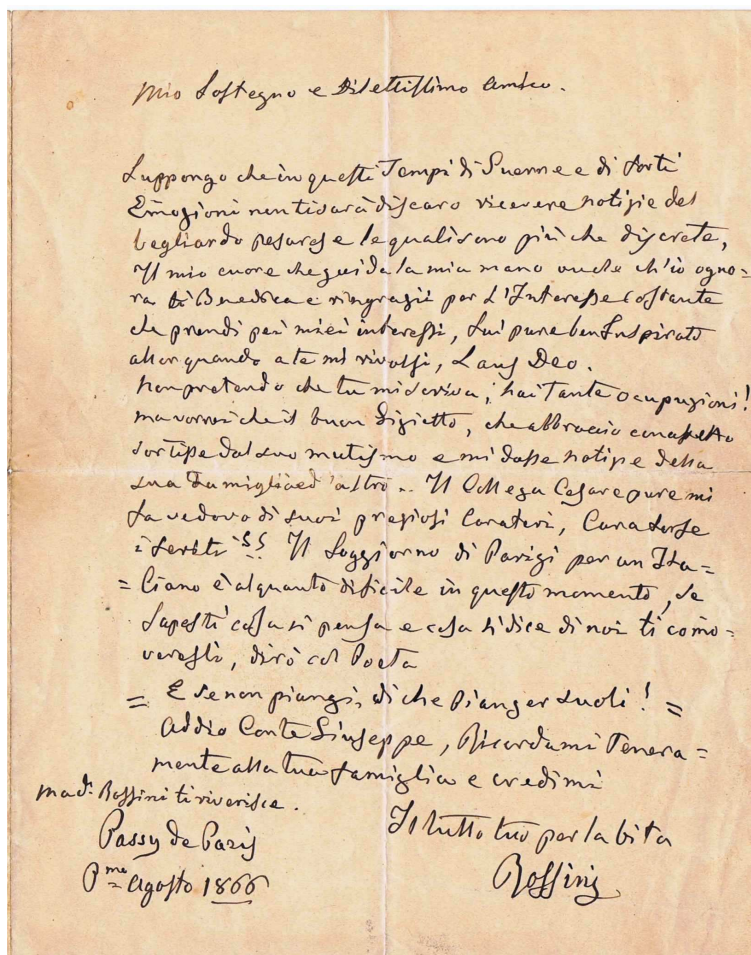


ロッシーニの自筆書簡 1866年8月1日付

(水谷彰良コレクションより)

ロッシーニの自筆書簡 ジュゼッペ伯爵[ジュゼッペ・マッテーイ]宛、1866年8月1日付



A [Mio sottegno e dilettilissimo amico] [Conte Giuseppe], Lettera autografa firmata di Gioachino Rossini
Passy de Paris P^{erelsic} Agosto 1866. [Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

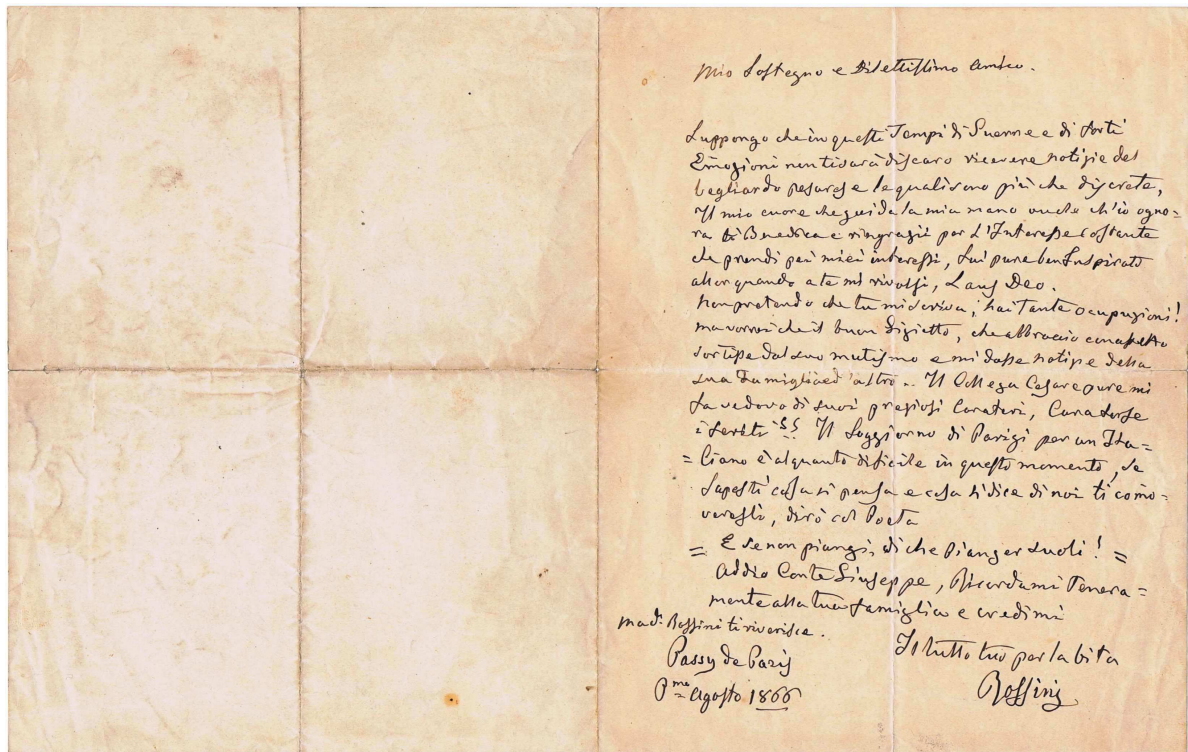
解説

晩年のロッシーニの胸中をうかがい知ることのできる手紙。用紙サイズは 23.5×34.3 cm (全体の複製は本稿末尾に掲載)、宛先の記載がなく宛名も不明だが、文章の末尾に「Addio Conte Giuseppe (さらば、ジュゼッペ伯爵)」とあり、ジュゼッペという名の伯爵に宛てたことが判る。晩年のロッシーニの友人で該当するのはジュゼッペ・マッテーイ (Giuseppe Mattei, 1811-96) 伯爵で、その兄チェーザレ (Cesare Mattei, 1809-96) を指すとおぼしき「Omega Cesare」も文中に書かれている。

マッテーイ兄弟はポーロニヤ有数の貴族で、筆者の調べではマッテーイ宛の書簡で現存を確認しうるのはこれが唯一と思われるが¹、晩年のロッシーニはポーロニヤのエージェントであるアンジェロ・ミニャーニや友人ガエターノ・ファービ宛の手紙にジュゼッペ・マッテーイへの伝言や挨拶を数多く記しており、1864年11月にはシャンパーニュ、翌1865年冬には50本のボルドー・ワインを同伯爵に贈っている²。この手紙における親しげな調子や心情の吐露からも、ジュゼッペ・マッテーイ伯爵宛であるのは間違いないだろう。

興味深いのは、1866年8月1日付のこの手紙が当時の社会情勢を背景に書かれたことである。6月14日にプロイセン王国がオーストリア帝国に宣戦布告して普墺戦争が勃発、イタリア王国もプロイセンと同盟を結んで同

月 20 日に参戦したが、イタリア軍は 7 月 20 日のリッサ海戦でオーストリアに大敗を喫していた。ロッシーニはそうした情勢をふまえ、「この戦争と強い動揺の時期に、君がペーザロの老翁 (vegliardo pesarese) の消息を知るのも不愉快ではないでしょう」と前置きし、「いま一人のイタリア人がパリに滞在することには、少なからぬ困難があります。もしも君が、人々が私たちのことをどう言い、どう思っているか知ったなら、さぞ心を乱されるでしょう。私は詩人と共にこう言いましょう。“これで君が泣かぬなら、君は何に泣くのか！ (se non piangi, di che pianger suoli!)”」と結んでいる。これはダンテ『神曲』の「地獄篇」第 33 歌からの引用である³。これに先立ちロッシーニは戦争の機運を危惧し、「私は流血を好みません」とヴェネツィア在住のピアニスト、ペルッキニーに書き送っていた (6 月 1 日付)。この戦争は短期間にオーストリア帝国の敗北に終わり、8 月 23 日のプラハ条約を経て、ヴェネツィアを含むヴェネト地方がオーストリア帝国からイタリア王国に割譲されている。



(2014 年 11 月作成 / 2015 年 3 月改訂。水谷彰良)

¹ マッテーイ伯爵の子孫が保管している可能性があるが、これに関する情報は無く、研究者の探索の手が及んでいないようだ。

² ガエターノ・ファービ宛、1864 年 11 月 8 日付と 1865 年 11 月 24 日付 (Carte Romagna., 405.227 及び 405.232.)。

³ 但し、ロッシーニはダンテ原文の末尾「？」を「！」と変えている。